

指導資料

特別支援教育 第200号

 鹿児島県総合教育センター
平成31年4月発行

対象
校種

小学校 義務教育学校
特別支援学校

重複障害児の動作の不自由さに配慮した集団学習の在り方 ー主体的に活動する児童を育む「遊びの指導」を通してー

動作の不自由さがある重複障害児は、集団学習において主体的に活動したり、友達との関わりが難しかったりする。そこで、重複障害児が集団学習を行う際の動作の不自由さに対する配慮事項や授業づくりなどについて、「遊びの指導」の実践例を通して紹介する。

1 はじめに

特別支援学校の重度・重複障害を有する児童は増加の傾向にある。こうした児童の特性として、運動機能や健康状態、知的機能の障害の重複が、能動的行為や活動そのものへの大きな制約となるため、生活経験や学習経験が制限されていることが多い。そのため、指導・支援に当たっては、児童の状態像を的確に捉え、具体的で実際的な活動を学習の中心に据え、主体的な動きを引き出すための十分な配慮が必要である。

2 重複障害児の集団学習

(1) 集団学習の意義

人間は精神活動を豊かにしていくために集団に参加し、そこで人間関係を作り、相互に交流を深めてよりよく生きる存在である。そのため、教師は児童に対して集団における学習を設定する必要がある。併せて、人間関係の形成や他者との相互交信を深めるための適切な指導・支援や、その発達についての理解も深めなければならない。

集団学習を行うことの意義として、①創造性の芽生えを育み、情緒を安定させる、②身近な社会事象に興味や関心をもたせる、③言

語の発達を促進させ、知的発達を促す、④社会生活の望ましい習慣や態度を身に付ける、などがある。

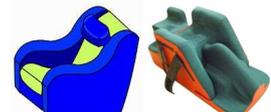
重複障害児は、認知機能や運動機能が発達の初期の段階に留まることが多く、教師と児童の個別指導だけでは、社会性の発達を促すことが難しい。そのため、少なくとも他者との関わりをもつことができる状況を、集団で行う授業の中で設定することが望ましい。

(2) 集団学習を行う際の配慮事項

重複障害児の教育において集団学習を実施することが難しいのは、彼らが身体を主体的に動かすことが困難であることが多く、自ら移動したり、自分の意思を他者に伝えることが難しかったり、ダイナミックな活動や児童同士の関わりが希薄になりがちだったりするためと考える。また、重複障害児の状態に合った教材・教具の準備や学習環境の設定ができていないことも原因として考えられる。

そこで、重複障害児の集団学習において、主体的な動きを引き出すために配慮しなければならない点を表1にまとめた。なお、配慮事項については、「見え方・聞こえ方への配慮」、「姿勢への配慮」、「コミュニケーション手段への配慮」、「学習空間への配慮」の四つの観点でまとめた。

表1 集団学習を行う際の主体的な動きを引き出すための配慮事項

見え方・聞こえ方への配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童同士、お互いの顔が見えるように席の配置を工夫する。 ・ 児童の視力や聴力、視野に応じ、提示物の大きさや位置及び明るさ、方向や距離、高さなどを配慮する。
姿勢への配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・ 座位姿勢を取らせる場合、基本的には骨盤中間位で、頸部の角度を保ちつつ、やや前傾位とし、足底を安定させ、肩や上肢の支持力を補う姿勢になるようにする。
コミュニケーション手段への配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・ AAC（拡大代替コミュニケーション）やアシスティブ・テクノロジー（障害者の生活を助ける技術全般）を活用し、児童が表現手段を習得できるようにする。 ・ 教材・教具への働き掛け、他の児童への働き掛けなど、児童自ら周囲へ関わっていく力を育める場を設定する。 <div style="text-align: right;">  <p>ピクマツク スーパーカー トーキングエイド</p> </div>
学習空間への配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童同士の関わりを促すため、お互いの顔をよく見られたり、触れられたりできる位置まで近づける。 ・ 姿勢保持が難しい児童の場合は、床に座り、教師が児童の身体を支えるか、クッションチェアやプロンキーパー（座位姿勢やうつ伏せ姿勢を保持する台形状のマット）で姿勢を保持する。その際、児童同士の顔が見えるだけでなく、隣の児童と少し手を伸ばせば触れ合えるくらいの距離とする。 ・ 児童同士が直接関わり合えない場合は、教師がその間に入り双方に関わりを促す。 <div style="text-align: right;">  </div>

3 重複障害児の動作の不自由さに配慮した「遊びの指導」の在り方

遊びの指導は、遊びを学習活動の中心に据えて取り組み、身体活動を活発にし、仲間との関わりを促し、意欲的な活動を育み、心身の発達を促していくものである。重複障害児の場合、発音が微弱なことも多く、その意図を読み取るためには、児童の表情や視線、手の動き、発声・発語などをより細かく観察していく必要がある。また、「遊びの指導」で構成した集団が、児童同士でお互いを意識しながら活動を行い、連帯感や一体感が生じる環境であったかどうかを吟味していく必要もある。併せて、授業後は児童の自発的な動きと自己決定、友達との関わり方の変容を確認し合うとともに、学習環境や教師の指導・支援の改善点などについて検討することも大事である。

そこで、この三つのねらいごとに重複障害児の「遊びの指導」の学習環境と教師の指導・支援の留意点について整理した（表2）。

表2 学習環境と教師の指導・支援の留意点

自発的な動き	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童の興味・関心に留意し、教材・教具を精選・工夫することで、児童の意欲を高め、活動量を増やしていく。 ・ 初期感覚である固有受容覚、前庭覚や触覚に刺激を入れる活動を取り入れる。 ・ 視覚探索や上肢操作がしやすい姿勢になるよう、頭部や頸部の安定、体幹の保持、上肢の各関節の安定と可動域のコントロールを図る。 ・ 動作や移動などの困難さへの対応を、装具等の補助的手段を用いたり、学習空間を狭めたりする。 ・ 児童が動作や移動などを行う際には、時間の確保を十分に行う。 ・ 児童の手を取って活動を促すといった身体への直接的な支援はなるべく避け、見本の提示や指さし、言葉掛けを中心とした指導・支援を心掛ける。 ・ 児童が活動に見通しをもてるようになったら指導・支援を減らすようにしていく。 ・ 児童の評価は、即時に行っていく。
自己決定	<ul style="list-style-type: none"> ・ 意思の表出の困難さへの対応を、AAC等のコミュニケーションツールを利用して行う。 ・ 聴覚情報だけでなく、視覚情報の提示を増やし、児童が見やすいように、方向や距離、高さなどを考慮する。 ・ 児童一人一人の表出能力を高められるよう、自己決定をする機会を増やしていく。
友達との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2～4人程度の小集団を構成し、手を伸ばせば他者に触れられる距離で活動できるようにする。 ・ 小集団を編成する際は、児童の発達の段階や興味・関心、交友関係などに留意して行う。 ・ 自分から友達に関われない際は、一緒に活動しているという実感を高められるよう、教師が場面設定をする。 ・ 友達と手を触れ合うといった身体接触する機会を増やし、一つの遊具を交代で使ったり、共有して使ったり、遊具までの移動を競争したりして仲間意識を高める。 ・ 友達の活動を見る機会を設け、遊び方や他者との関わり方が学べるようにする。また、その際、お互いに活動している様子が見えるような姿勢と位置に気を付ける。 ・ 友達や教師を遊びに誘ったり、遊びを手伝ったりする機会を設け、他者と関わる楽しさが経験できるようにする。

4 実践例

重複障害児の動作の不自由さに配慮した「遊びの指導」の実践例を紹介する。

本県のA特別支援学校では、「遊びの指導」の授業を行う際、年度当初に重複障害児の全担任で「基本的な考え方」、「配慮事項」、「指導の形態」、「指導内容」に関する共通理解を図った。授業を行う際、遊びの指導における児童の主体的な姿は、担当者全員で共通理解しておく必要があるため、表3に示すような、一人一人の児童の主体的な姿を共通理解した上で、担当者が児童の個人目標を設定した。

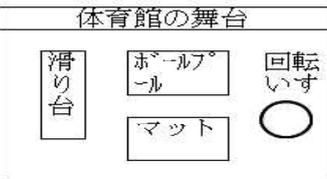
その後、小学部第1～6学年の実態から発達の段階に応じて、「大人との情動的な関わり合いを大切にする段階」、「感覚遊びを好

む段階」、「目的遊びから模倣遊び段階」の3段階でグループ構成を行った。授業実施前に、各担任は表3を参考に担当児童の個人目標を設定し、授業チーフの職員は題材目標や授業に使用する教材・教具や使用方法の指導略案を作成した(表4)。

表3 引き出したい主体的な姿

児童に関する引き出したい主体的な姿
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習活動に興味・関心を示す姿 ・ 目標や課題意識をもって取り組む姿 ・ 学習活動を繰り返し行う姿 ・ 学習活動を存分に楽しんでいる姿 ・ 自分が遊びたい遊具を選ぶ姿 ・ 自分なりに遊び方を工夫する姿 ・ 活動したい遊具まで自発的に移動する姿 ・ 活動している最中の自発的に動く姿 ・ 身体の動きを向上させようとする姿 ・ 「もう一回」「まだしたい」などと教師に要求する姿 ・ 他者との関わりに興味・関心を示す姿 ・ 自分から進んで他者へ関わる姿 ・ 達成感・満足感を得ている姿

表4 「遊びの指導」の指導案Ⅱ

「遊びの指導」指導案(Aグループ) 2学期			
日時	平成○年10月7, 8, 10日(月, 火, 木) 3校時		
場所	体育館		
題材	粗大運動あそび ～すべる・まわる～		
目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 遊びたい遊具を選び、「すべる」、「まわる」動きを楽しむことができる。 ○ 同じ遊具での遊びを通して、友達や教師との関わりを楽しむことができる。 		
個人目標	B児 <ul style="list-style-type: none"> ・ 遊びたい遊具を言葉で伝えたり、遊具まで教師と一緒にいき、遊ぶことができる。 ・ 一緒に活動する友だちの様子を見ながら、待ったり、同じ遊具で一緒に遊んだりすることができる。 	C児	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分で活動したい遊具を指さしや写真カードで選んで遊ぶことができる。 ・ 遊具のところまで自分で移動して、友達を手招きして活動に誘うことができる。
時刻	学習内容・活動	指導上の留意点	準備
10:45 (導入)	「はじまりの歌」を聴きながら、活動場所に集まる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 早くきた児童は、後から来た同じグループの友達を呼び、仲間意識を高められるようにする。 ・ 友達が遊んでいる様子を見る時間を設定し、どんな遊具があるのか伝え、遊ぶ意欲が高まるようにする。 	ラジカセ
10:50	1 遊具の紹介をきく。		クッション
11:00 (展開)	2 自由に遊ぶ。 ・ 回転いす、滑り台 ・ ボールプール、マット	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遊具の写真カードをグループごとに掲示し、遠くにある遊具の選択もできるようにする。 ・ 至近距離で活動する機会を設け、友達を意識しやすいようにする。 	写真カード 回転いす 滑り台 ボールプール マット
	体育館の舞台 	 至近距離でのグループ活動	
11:25 (終末)	「おわりの歌」を聴きながら友達とお別れのあいさつをする。	指導上の留意点 <ul style="list-style-type: none"> ・ 児童の体調を十分に把握し、無理のない活動にする。 ・ 教具や周囲の安全を十分に確認し、事故のないように注意して活動する。 ・ 児童への支援は最小限に抑えて、できる限り意欲や自発的な動きを尊重する。 ・ 活動を意識できるような言葉掛けや、実際の活動を見せることで意欲を高めるようにする。 	

授業実施後は毎週行われる定例会において、児童の主体的な姿を引き出せていたかどうかや、教師の指導・支援が適切であったのかなどについて授業担当者同士で振り返り、出された意見は毎回記録をとった（表5）。

表5 話し合い内容をまとめた記録表

記録の留意点	<ul style="list-style-type: none"> ※ 児童の様子や指導展開と内容及び教師の指導・支援や学習環境について記録する。合わせて、次回の学習に向けた改善策等も記入する。 ※ 題材終了後のまとめや次学期への改善点等も記入する。
記入例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1学期と同じ形を取ることで、B児は見通しがもてていたように思う。友達と一緒に活動するという意識をすぐにもつことができていた。 ・ 休みの児童もいたためグループが組めないことがあったが、他グループに融合することができていた。また、一緒に活動したいグループを自分で選ぶことができた児童もいた。 ・ 遠くにある遊具の選択ができるように写真カードを使用することで、C児は自分から遊びたい遊具を選び、自ら移動することができた。 ・ 至近距離で活動する機会を設けたことで、友達との関わり合いが増えたり、友達の遊びを手伝ったりする姿も見られた。次回も引き続き、至近距離で活動する機会を設け、児童同士が関わり合う機会を大事にしたい。

表6 児童と教師の評価表

児童の評価	B児	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>遊具の名前を言って遊具を選び、自分から遊ぶことができた。</u> ・ 1学期の活動と比べて、友達の様子を見たり、順番を待ちながら笑顔になったりすることが多くなった。<u>一緒に遊ぶときも自然と友達の体に触れることができるようになった。</u>
	C児	<ul style="list-style-type: none"> ・ 複数の遊具を自分で見て確認し、指さして選ぶことができた。 ・ <u>自分で選んだ遊具のところまで自力で移動してから、友達に手招きをして遊びに誘うことができた。</u>
教師の評価	B児担当	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達と一緒に行動することができるように、「一緒に。」や「順番。」などの言葉掛けを多く行った。その結果、単独で行動することが減った。 ・ 自分で遊ぶ以外のときも、友達の遊びを手伝うなどして、自然と関わりをもつことができた。
	C児担当	<ul style="list-style-type: none"> ・ 好きな友達と一緒にグループにしたことで、積極的に手招きをしたり、友達の活動の様子に注目したりすることを促すことができた。 ・ 遊具を選択する際、自分で移動するように促すと、移動することに力を注いでしまうので、選ぶことを達成できるように次回は写真カードを準備する。

題材終了後は定例会において児童と教師の評価を行い、次月の題材や年度の後半に位置付けている同じ題材名の活動の際に生かすよ

うにした（表6）。

こうした流れで授業づくりを行うことで、児童が遊具まで自分で移動したり、遊びたい遊具を自ら選んだり、友達を遊びに誘ったりするといった、主体的な動きが以前よりも増えた。

また、教師の変容として、児童の欲求、興味、発達水準、経験などに合った遊びを提供したり、一人一人の児童が意欲的に取り組み、没頭できる活動を準備したりすることができるようになった。さらに、児童同士が自然と関わりをもち、児童と共に遊び、共感する、遊びの場を盛り上げる、遊びに誘う、励ます、称賛するなど、それを楽しめるような支援を行う機会も増えた。

このように、児童一人一人の課題解決に向けての手立てを共有し、より効果的な学習環境を整えたり、指導・支援の向上を図ったりすることができた。

5 おわりに

重複障害児の動作の不自由さに配慮した集団学習の在り方について、ねらいや配慮すべき点などを授業者全員で共通理解し、一時間の授業ごとに指導展開や内容及び教師の指導・支援や学習環境について振り返り、改善を重ねていくことが大切である。重複障害児がより主体的に活動できるように学校ごとに実践を積み重ねていってほしい。

－引用・参考文献－

- 文部科学省『遊びの指導の手引』1983年、慶應義塾出版
- 川間健之介著『視覚認知の発達と支援』2007年、ミネルヴァ書房
- 日本重複障害教育研究会『いのちはぐくむ支援教育の展望－重度・重複障害児の集団で行う授業をどうするか－』2007年、日本重複障害教育研究会
- 小出進著『遊びの指導－よりよく遊べる状況づくりへの挑戦－』1992年、学研
(特別支援教育研修課 阿久根 剛)